
麻帆良に降り立つ欲望の鳥

獅子座

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

麻帆良に降り立つ欲望の鳥

【Nコード】

N1567W

【作者名】

獅子座

【あらすじ】

真木、ウヴァとの戦いを終え、その「命」を終えた鳥系グリード・
・アंक

彼が目覚めると、そこには神を名乗る男

アंकは、己の欲望を叶える対価として、その男の手伝いをすることに

その手伝いとは・・・生きることだった。

砕けたメダルと神と命（前書き）

欲を持たない青年、火野映司と腕だけの怪人．．．アंक
彼らの出会い、そして数多の「欲望」が渦巻く物語
映司たちの戦いはついに終わった。

「欲望」の結晶．．．オーメダルの消滅という形で

砕けたメダルと神と命

「映司、目え覚ませ！死ぬぞ！？」

戦いが終わり、地上へ落ちていく映司をたたき起こす。

「アंक．．．」

目を覚ました映司は、腕だけの俺を見て驚いた表情で呟く。

「いいよ．．．もう無理だ。お前こそ．．．」

映司は、落ちながら諦めたように話す。

俺のコアメダルは、真木を倒した後砕けた。

今此処にいる俺は、メダルに残った意識が形を変えた存在．．．魂
ってやつなんだろうな。

「フン．．．俺は良い。欲しかったものは手に入った」

「それって命だろ？死んだら．．．」

ああ、そうだ。

俺は命が欲しかった。だが．．．

「そうだ。お前たちという間に、ただのメダルの塊が死ぬとこまで
きた。こんな面白い．．．満足できることがあるか」

俺の言葉を聞きながら、映司は何も言わず俺を見続ける。

「お前を選んだのは、俺にとって得だった。間違いなくな」

「おい、どこ行くだよ！」

そう言つて、俺は映司から離れていこうとすると、映司が俺を呼び
止める

俺は．．．もう満たされた。

だから、映司．．．

お前も．．．欲しかったものを掴め。

「お前が掴む腕は．．．もう俺じゃないってことだ」

そう言つて．．．俺は消滅した。

「ここは・・・何処だ？」

一面真っ白な空間

空も地面も、壁もない

立っているのか、寝ているのか

浮いているのか、漂っているのか

それすら曖昧なこの空間に、俺は居た。

おかしい。

俺の意識を司っていたコアメダルは砕け、俺という「人格」は消滅したはずだ。

なのに、なぜ「俺」はここに居る？

「目が覚めたか？欲望の鳥」

俺の背後から声が聞こえ、振り返ると、一人の人間が居た。

その姿は白い髪を腰まで伸ばし、黒いスーツを着ている

男とも、女ともとれる中性的な顔立ちをしているが、背格好からして男だろう。

「お前は・・・なんだ？」

我ながら、変な質問だと思う。

だが、「コイツ」は人間ではない。

ましてや、俺のような「グリッド」とも違う。

存在の次元が違う

本能的に、そう感じた。

「誰、でなく何と聞く・・・か。まあ、お前の質問に答えるならば・

・ある者は俺を「世界」と呼ぶものもいれば、「宇宙」と呼ぶものもいる・・・「神」と呼ぶものもいるな」

「神・・・だと？」

「正確には、神の中の一柱だがな。俺の専門は・・・「観察」。世界の動きを見て、そのデータを最高神に渡すのが、俺の仕事だ」

自分を神と名乗る男の話は、正直胡散臭いが、それよりも重要なことがある。

「お前が神だというのは一旦置いて．．．なぜ「俺」が此処に「居る」？俺のコアは砕けて、人格は消滅したはずだ」

「その理由を挙げるなら、お前に興味を持った．．．この一言につきるな。「欲望」の集合体であるメダルから生まれたグリードが、人間に憑依し続けることで人間らしくなった。これほど興味深いことなはい」

そついうと、神（仮）は、「そこで．．．」と言って俺を見る。

「お前には、俺の観察の手伝いをしてほしい」

「お前の観察の手伝いだと？」

俺は、神の言葉を鸚鵡返しのように言いながら、神を見る。

「そつだ。お前をある世界に送る．．．そこで、好きに生きる。それだけだ」

その言葉を聞いて、俺は啞然とした。

手伝いの内容が、送られた世界で好きに生きるだと？

「どうということだ」

「世界には無限の可能性がある。本来、その世界にいるはずのない存在が新たに加わることで、世界は新しく道を広げる．．．お前には、ある世界．．．正確には、「ある世界の平行世界」に行つてもらつ」

行つてもらつ．．．か。命令ということに腹が立つが、今の俺の命は神に握^{コイツ}られている。

「それは良いとして、俺に得があるのか？」

「お前の欲望．．．たしか、「命」だったか。それをくれてやる」

「ほお．．．」

その言葉を聞いて、俺は考える。

神は俺を使つて世界を「観^{コイツ}察」する

そして、俺は神から「命」を貰う。

一応、利害は一致する訳か。

「わかった。お前の話に乗ろう」

「お前なら、そういうと思っていた」

そう言うと、神は俺に向かって「あるもの」を投げ渡した。

「受け取れ。お前には必要なものだろう？」

「！コレは・・・」

神が投げてきたもの・・・それは、金縁に鳥の刻印が施された赤いメダル

俺のコアメダル9枚だった。

「それと・・・」

神が右手を俺にかざすと、暖かいものが体を包む感覚と、代わりに何かが抜ける

そんな感覚がした。

「お前の欲望どおり、命をくれてやったぞ。代償として・・・ヤミーを生む力を奪ったがな」

ヤミー・・・

俺たちグリードが持つセルメダルを人間に入れることで生まれる欲望の怪物

欲望を「餌」にすることで体内にセルメダルを蓄える、俺たちグリードがセルメダルを生み出す手段。

「お前・・・！」

「そう怖い顔をするな。セルメダルを生む手段は代わりに渡している」

神がそういうが、俺はセルメダルを生み出す手段はヤミー以外知らない。

「お前を送る世界には「魔法」がある。それを吸収することで、セルメダルを作れるようにした」

「魔法・・・だと？そんなもの、あるわけが」

「お前たちグリードだって、人間の欲望を元に、錬金術師が生み出

した存在だ。魔法がある世界だって、無限にある世界の中ではあつておかしくない．．．それに、その世界にはオーズはいない。仮にヤミーを作り出しても、それを倒す存在がいないのであれば、ヤミーは必要ないだろう？」

神の言葉を聞いて、俺は考えた。

ヤミーに、人間の武器は通用しない

それは、おそらく魔法もそうだろう。

毒をもって毒を制すと言うように、メダル之力に対抗するにはメダル之力

オーズや真木が作ったバースといったメダル之力を使える奴しか倒せない。

それ以外でヤミーがメダルに還るには、一定量のセルメダルを渡しに来る時か。

となると．．．ヤミーは必要ないかもな。

魔法を使える奴の力がどの程度か知らないが、グリードは欲望の王その気になれば、単体で世界を滅ぼすことも出来る。

それに．．．貴重なセルメダルを消費することなく蓄えることが出来るのは魅力的だ。

「ああ。そうだな」

そう思った俺は、神に対して賛成の意をとなえた。

「では、早速行つてもらうとしよう」

そういった神の背後に、大きな扉が現れる。

「この扉をくぐれば、世界に着く。移動手段もすでに用意している」
「至れり尽くせりつてやつか？」

「世界の可能性を観察するためだ」

口元を歪めて笑う俺に、神は淡々と答える

それを一瞥すると、俺は扉に向かって歩き出した。

「俺に見せてくれよ？新しい世界の可能性を」

「俺は俺が生きたいように生きるだけだ」
神の言葉にそっけなく返事をする、俺は扉を開けて世界をくぐっていった。

キャラクター設定

アंक

本編の主人公にして、「仮面ライダーオーズ」に登場する鳥系グライダー。

真木、ウヴァとの戦いの後、コアメダルが砕けて消滅した．．．のだが、神によって「命」を与えられ

その対価として、「世界を観察する」手伝いをするに。

序章で語られることはなかったが、新たに人間の器を与えられており、世界を確かに感じる事が出来る。

コアメダル、セルメダルを持つているため、グリードの姿になったり力を使うことが出来るが、ヤミーを生み出す力を失った

代わりとして、魔法を吸収し、セルメダルに変換する力を与えられている。

人間の姿は、泉信吾の肉体を借りていた時と同じ姿

さらに、神から「いざという時の切り札」を渡されているが、アंकはそれに気づいていない．．．というより、序章で語られていない。

現在所持しているものは体に内包されたコアメダルとセルメダル

●phonと●padのみ

出会いと人助けと自販機（前書き）

かなりグダグダになってしまいました。

それと、キャラクター設定以外でセルメダルを貯める方法として、鈴神様のアイデアを使わせていただくことにしました。

出会いと人助けと自販機

神との取引を終え、扉をくぐった先は、洋風な町並みだった。少なくとも、俺がいた街にこのような建物は並んでいなかった。

（まさか．．．此処は日本じゃないのか？）

そう思いながら街を歩いてみる。

よく見ると、建物に取り付けられた看板に書かれてある文字は日本語だった。

だが、それだけでは日本だと断定する決定打にはならない。

もっと手がかりが必要だ。

そう思っ歩いていた時．．．

ドンッ

「！」

「きゃっ！」

俺は、誰かとぶつかった。

ぶつかった相手は尻餅をついたらしく、視線を落とすと．．．

「いたた．．．」

日本の伝統的な衣服．．．着物だったか？

それを身に纏った女がいた。

「はあっ．．．はあっ．．．」

ウチ．．．近衛木乃香は逃げていた。

事の発端は、無理やり決められたお見合い

お見合いが趣味なおじいちゃんは、度々ウチにお見合いをさせてきた。

それも、相手はウチの倍以上の年の人と。

ウチには、お見合いとか結婚なんてまだ早い

せやから、何度も抜け出しては逃げている。

今回は違つみたいで、相手の方から勝手に決めてきたみたいや。

街の中は、ウチを探し出そうと、スーツの人たちが走りまわつとる。見つかったら、またお見合いや。

それが嫌で、ウチは走つた。

細い路地を抜けたら大きな道に出る。

そこを右に曲がろう。

そう思つて。

そんな時やつた

ドンッ

「！」

「きゃっ！」

右に曲がつたウチは、ちょうど歩いていた人にぶつかつてもうた。

「いたた．．．」

尻餅をついて、かすかに痛むお尻をさすりながら、ぶつかつた人を見上げる。

その人は．．．

黒いＴシャツの上に白いシャツを羽織り

下は赤いスラックスに茶色いブーツ

金髪を右に流すようにセットした、ガラの悪そうな人やつた。

俺にぶつかつた女．．．

そして、その女が離す言葉から見て、此処が日本だということに間違いない

そう、俺は確信した。

「見つけたか？」

「いや、まだだ」

俺が女を見ていると、近くから２人の男の声が聞こえる。

「アカン．．．逃げな」

男たちの声が聞こえたのか、着物を着た女は立ち上がつて逃げよう

とする。

別に興味などないから、また街を歩こうとした．．．だが、俺の頭に、ある言葉がよぎった。

『ヤミーを生み出す力を奪った』

あの時、俺と取引をした神はそう言っていた。

だが、本当に俺はヤミーを生み出すことが出来なくなったのか？
そう思うと、俺は女の腕を左手でつかんだ

「え．．．？」

腕をつかまれた事で女は困惑しているが、俺には関係ない。

右手を握り、開くと．．．そこには、1枚のセルメダルが現れる。

「お前．．．逃げたいんだよね？」

「せ、せやけど．．．」

だつたら丁度いい。

この女の「逃げたい」という欲望

ヤミーが生まれるかはわからないが、これを実験台に使わない手はない。

俺がメダルを女に見えるようにすると、女の額にメダルを入れるスリットが現れる。

「その欲望、俺が叶えてやる」

困惑する女を他所に、俺はセルメダルをスリットに投入した。

ドクンツ．．．

「？」

なんだ？

メダルを入れるスリットが現れ、俺はそこにセルメダルを投入した。
本来なら、白ヤミーが出てきてもおかしくない。

だが．．．セルメダルを入れたとたん、俺は違和感に襲われた。
なんと言えば良いのか分からないが、目の前の女と「繋がった」
そういう感覚がした。

そして、俺は．．．

女の手をつかんだまま、走り出した。

ウチとぶつかった人．．．その人は、ウチに1枚のメダルを見せてきた。

銀色で、真ん中に×印が刻まれたメダル

それを．．．その人は、ウチの中に一入れた（．．．）

ドクンツ．．．

メダルを入れた瞬間、ウチの中で何かが脈を打った。

それと一緒に、目の前の人と繋がった．．．

そんな感じがした

そう思ったら、男の人は、ウチの手をつかんだまま走り出した。

「え、あの．．．」

男の人．．．名前が分からんけど、その人はスーツの人たちに見つからんように走り続ける。

すると．．．

「いたぞ！こっちだ！」

「チツ．．．見つかったか」

ウチらが通り過ぎた細い路地

そこから出てきた人が、ウチらを指差して大声を出す。

それを聞きつけたのか、あたりを探していた人が数人走ってくる。

「行くぞ」

「は、はい」

男の人は、焦った様子もなくウチに告げると、再び走り出す。

そうして、何本目かも分からない細い路地を抜けると、大きな路地にでた。

女の「逃げたい」という欲望

それからヤミーが生まれるか試しただけだった。

それだけなのに．．．俺は女と男たちから逃げていた。
何故かは分らない。

だが．．．

チャリン．．．チャリン．．．

俺の中で、メダルが貯まる音が聞こえる
どうやら、人間にセルメダルを入れると、その欲望に基づいて動か
なければいけないらしい。

どこかガメルのやり方に似ているが、面倒だな。

そう思いながら、何本目か分からない路地を抜け、大きな路地に出
た俺は．．．見覚えのあるものを見つけた。

「止まれ」

「きゃっ．．．何やの？」

俺が足を止めると、勢いがついたままだったのか、女は俺の背中に
ぶつかる。

だが．．．俺の意識は目の前のものに集中していた。

黒いボディに白のカラーリング

動物の描かれた缶がディスプレイされた—自動販売機（．．．）

間違いない．．．あれは、ライドベンダー

鴻上が作り出した、セルメダルをエネルギーにするマシンだ。

神が『移動手段は用意してある』と言っていたが．．．まさかコレ
とはな。

ライドベンダーに歩み寄ったその時．．．

「はあ．．．はあ．．．」

俺たちの後ろに、数人の男がやってきた。

ウチらが自販機に近づいたその時、スーツの人たちがウチらの後ろ
にやってきた。

「その子をこちらに渡していただきたい」

リーダーの人が、男の人に言う。

ウチが男の人の後ろに隠れると、その人は後ろ手にウチに入れたものと同じメダルを一枚渡してきた。

また、ウチに入れるつもりやるか？

そう思てたら．．．

「後ろの自動販売機に入れて、鳥の絵が描かれた缶のボタンを何度も押せ」

小声で、ウチにそう言うてきた。

なんで、この人はウチが逃げるのを手伝ってくれるんやるか？
それに．．．

『お前の欲望、俺が叶えてやる』

そう言うて、メダルをウチに入れた

この人は．．．いったい．．．

「グズグズすんな。逃げたいんだろぅが」

そんなことを考えていると、男の人はウチを急かしてくる。

そうや．．．ウチは、お見合いが嫌やったんや

ウチは、男の人の言うとおり、メダルを自販機の投入口に入れて鳥の描かれた缶のボタンを何度も押した。

すると、軽快な音楽とともに、缶が何個も、何個も出てきた。

大当たりにしては．．．この数は多くないやるか？

そう思てると、男の人は足元の缶を1つ取って、プルタブを起こした。

「コイツを渡す．．．か。その答えは．．．ノーだ」

そう言うて、男の人が缶をスーツの人たちに見せる。

すると．．．

カシャカシャカシャッ！

缶は姿を変え、鳥の形をした口ロボット（？）になった。

男の人が持ってた缶だけやない。

カシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャ！

ウチらの足元に転がっていた缶も、鳥の形になってスーツの人たちに向かって飛びたつ。

「なっなんだ?!」

「うわっ!」

スーツの人たちが鳥のロボットに驚き、顔を腕で覆っている隙に、男の人は自販機にもう1枚メダルを入れ．．．今度は、真ん中にある大きなボタンを押した。

ガシャツガシャガシャツ．．．ブオンツ!

自販機は、どんどん姿を変えていって．．．1台のバイクに変わった。

大学の工学部が新しく作ったんやろか?

「乗れ」

「あ、はい」

ウチは、男の人に促されるまま、バイクに乗る。

それを確認した男の人は、男の人たちが混乱している間にバイクを走らせた。

タカカンドロイドに目くらましさせている間に、俺たちはライドベ
ンダーに乗って大きな建物の前まで来た。

ベンダーを降りて辺りを見回す。

よく見ると靴箱や制服を着た人間が多い。

と言うことは．．．ここは学校という場所か?

「あゝ、お兄さん」

見回しながら考えていると、女が俺に話しかけてきた。

「助けてくれておおきに。ウチ、近衛木乃香言います。お兄さ「ア
ンク」」

女．．．木乃香が俺に話すのを遮って、俺は短く名前を言う。

「アンクさん、これからどないするんですか?」

「お前の欲望は叶ったみたいだから、此処がどこなのか情報を集める」

木乃香の質問に、ライドベンダーに乗りながら話すと．．．

「せやったら、おじいちゃんのところまで案内しましょうか？」

「あ？」

「おじいちゃん、この学園の学園長しとるんです」

木乃香の言葉に訝しげな態度をとると、そんなことを言ってきた。

学園長．．．か

此処が何処かの情報．．．運がよければ、魔法使いとやらの情報も得られるかもな。

俺は、木乃香の提案に乗ることにして．．．『麻帆良学園』に足を踏み入れた。

対談と交渉と吸血鬼（前書き）

今回もグダグダになってしまったかなと感じる獅子座でございます；

サブタイに吸血鬼と書いていますが、登場は最後の所だけという；

対談と交渉と吸血鬼

俺は、この世界に来て出会った女．．．木乃香と、麻帆良学園の学園長室前に来ていた。

「ここが学園長室や。ちょっと待っててな」

木乃香はそう言っと、学園長室のドアを叩く。

「おじいちゃん、入るえ」

ドアを叩き、木乃香がドアを開けて入るのに続いて、俺も中に入る。だが．．．俺は目を疑った。

「おお、このか．．．む？その青年は誰じゃ？」

学園長室に入った俺たち．．．正確には、木乃香を見ているソイツは．．．果たして人間なのか？

白い髭や髪は老いた人間相応だが．．．ソイツは、「後頭部が異様に長かった」。

グリードかとも考えたが．．．コイツからはメダルの気配が全くしない。

だが、この人間からは．．．メダルとも違う「力」を感じる。なるほど．．．コイツは当たりかもな。

「なるほど．．．あの見合いから．．．儂も、先方の勝手な決定には困っておったんじや。アंक君じゃったかの、感謝するぞ」

「ウチからしたら、おじいちゃんの趣味も困りものやけどな」

木乃香が説明を終えると、爺は俺に礼を言ってくる．．．が、横やりを入れるように木乃香が爺に率直な愚痴を漏らす。

「む．．．これからは自重するわい。それで、このか。儂はアंक君と話がしたいから席を外してもらえんかの？」

「ん、分かったえ」

爺が苦笑しながら木乃香に言っと、木乃香は頷いて学園長室から出

て行つた。

「．．．それで、アंक君じゃったか。お主は．．．何者じゃ？」

木乃香が出て行つた瞬間、爺の雰囲気が変わつた。

表の顔から裏の顔へ。

俺を見るその目は、俺の奥を覗こうとしているようだ。

食えない爺のようだが．．．俺は、この爺以上に食えない人間を知っている。

鴻上晃生。

鴻上ファウンデーション社長であり、800年前の．．．初代オースの子孫。

欲望に正直であり、それ故にその真意は誰にも気づかせない。

そんな人間を相手にしたんだ。

このくらい、どうつてことない。

「まずは自分の名前を言つたらどうだ？この世界はギブ・アンド・テイク．．．そうだろ？」

「む、そうじゃな。僕は近衛近右衛門。この麻帆良学園の学園長をしておる」

そう言つて爺．．．近右衛門は自らの名前を言う。

「それで、お主は何者じゃ？」

「アंक。それ以上でもそれ以下でもない」

「僕は、お主が何者かか知りたいのじゃがのお」

近右衛門が俺にそう言うが、知つたことか。

「何度も言うが、ギブ・アンド・テイクだ。お前は名前を教えた．．

．だから俺も名前を教えた。もっと詳しく知りたいんだつたら、お前も教えるんだな」

我ながら屁理屈だと感じる。

だが、コイツから詳しい情報．．．知識を貰わない限り、俺も正体を教えない。

等価交換つて奴だ。

俺が何か知りたいなら、お前も相応のことを俺に教える。
そう思いながら俺は近右衛門を睨んだ。

儂と対峙している青年．．．アंक君。

孫娘のこのかが連れて来たときの第一印象は、一見すると粗暴そうな青年

それだけじゃった。

じゃが．．．このかから、魔力とも気とも違う力を微かに感じた。
それも．．．注意しないと見落としそうなくらい微かな。

そして．．．このかから感じた力
それを、アंक君から感じ取る事が出来た。

ただ．．．その桁が違いすぎる。

このかからは微かに感じた力の残滓が、アंक君からとても濃く感じた。

「西」からの刺客

その線で考えてもみたが、彼は儂の顔を見ても何も感じておらんようじゃ。

それから．．．先の問答へと移る。

ここで分かった事は、アंक君は「西」との関わりが薄い．．．否、ないと言ってもいい。

むしろ、魔法と関わった事すらないのじゃろう。

じゃが．．．彼から感じる力

これは何じゃ？

教えてもらおうにも、アंक君は「等価交換」の姿勢を崩さん。

どうやら．．．儂が折れん限り、彼が自分の事を話すことは一生かかってもなさそうじゃの．．．。

「．．．仕方ないの。じゃが、君にも教えてもらうぞ？」

溜め息をつく、儂は話し始めた。

この学園の裏の顔．．．関東魔法協会について。

近右衛門の話聞いて、改めて当たりだと確信した。

この学園・・・麻帆良学園は、表向きはあらゆる教育機関が集まった一つの都市だが

その裏の顔は「関東魔法協会」。

教師、生徒の一部・・・と言っても数十人単位だが、魔法使いらしい。

「儂が話せる内容はこれで全てじゃ・・・今度は、君の番じゃぞ？」
話し終えた近右衛門が俺を見る。

馬鹿正直に全て話すか考えたが・・・コイツの口から、俺が知りた
い情報は全て聞く事が出来た。

まあ、良いだろう。

「ああ、今度はお前の「欲望」を満たす番だな」

俺はそう言うと、右腕をグリードの姿に変えて近右衛門に見せる。

「俺はアंक・・・800年前、人間に作り出された『グリード』
だ」

俺は、全てを話した。

メダルとグリード・・・それに伴うオーズの誕生

800年前の封印

そして・・・封印が解けてからの1年

世界の終末をかけた闘いの全てを。

「ふむ・・・そのような事が、別の世界で起きておったのか」

近右衛門は、俺の話を聞いて唸っていた。

「で・・・一つ聞きたいのじゃが、このかから感じた力とアंक君
から感じた力・・・なにか関わりがあるのかの？」

「ああ」

そう言って、俺はセルメダルを1枚取り出した。

「コイツを木乃香に入れた」

「その．．セルメダルという物を、かの？」

セルメダルを見ながら質問してくる近右衛門に、俺は頷いて答える。
「ヤミーが生まれるか試したんだが．．面倒な事に、欲望を叶える手伝いをさせられるとはな」

「お主が言うヤミーとは、どういうものなのかの？」

「簡単にいうなら、入れた人間の「欲望」が生み出した化物．．それがヤミーだ」

俺の話を聞いて、近右衛門は更に眉間の皺を深くする。
それもそうだろうな。

人間の欲望から生み出されたメダル。

その集合体であるグリードは、いわば「欲望の王」

さらに．．世界を呑み込めるほどの力を持っているときた。
のさばらせておく訳にいかない。

そう思っているんだろう

「それで．．お主は、その力で何をするのかの？」

「返答次第では、手荒になる」そう言いたげに近右衛門は俺を睨んでくる。

俺が何をする．．か。

そんなもの、決まっている。

「生きる。それだけだ」

「生きる．．とは？」

「俺たちグリードはメダルの固まりだ。食っても、見ても、触つても．．何も『感じない』。だが、俺は『命』を貰った。だったら、今まで以上に．．もっと世界を感じたい」

僕は、アंक君の言葉を聞き．．考えた。

食べても、見ても、触れても、何も『感じず』．．『満たされな

い』。

それは、地獄とも呼べるものじやろう。

じゃが．．．彼は、人の体を借りる事で世界を感じた。

食べて、見て、触れて．．．メダルの固まりじやった頃に感じれなかったものを感じれたのじやろう。

そして．．．蘇った彼の願いは『生きたい』．．．か。

その言葉を聞いた僕は、警戒を解いた。

「あい分かった。お主の住居は、知り合いに頼むとしよう」

そう言つて、僕は携帯を取り出した。

電話をかける相手は．．．彼女。

この学園に長い事居続ける．．．否、縛り付けられている一人の少女
もしかしたら．．．アंक君と出会う事で、彼女が変わる切っ掛け
になるやもしれん。

僕は．．．そう感じた。

近右衛門との話を終え、得た物は2つ。

一つは、この学園の情報

一つは、この学園で暮らすこと

その代価として、俺は自分の事を話し．．．夜中に行われる『警備員』の仕事を引き受ける事になった。

今は、俺の住む場所を提供してくれるという人間を待っていた。

近右衛門が電話をして15分経った頃か。

「私を呼び出して何の用だジジイ．．．む、誰だコイツは？」

ドアをノックもせず、一人の人間が入って来た。

ウェーブのかかった金髪に青い瞳

そして．．．低い身長。

近右衛門が呼んだ知り合いは．．．ガキだった。

呪いと解呪とエヴァの欲望（前書き）

今回もグダグダであり、書きながら

「あれ？アंकとエヴァってこんなキャラだったか？」

と思ってしまった獅子座でございます；

本作のお気に入り件数が60件を越えました

これからも、皆様に楽しんでいただける作品を作って行こうと努力していきます

呪いと解呪とエヴァの欲望

近右衛門が呼んだ知り合いがガキだった事に、俺は驚いていた。まさか．．．この爺、ガキの世話になれとでも言うのか？

「おお、急に呼び出してすまんの。エヴァ、この青年．．．アंक君を、お主の家で住まわせてくれんかの？」

「巫山戯るなよジジイ。何故私がいきなりこの男の世話を見なきゃならんのだ」

近右衛門の言葉に、ガキ．．．エヴァというらしい。

ソイツは反論する。

ま、当然か。

いきなり呼び出されて、一言目が「お前家で住まわせてくれんか？」だ。

仮に、俺が同じ立場になっても願ひ下げだ。

「第一ジジイ、貴様は人間を私に預けようなど．．．」

「それがの．．．彼は、ただの人間じゃないのじゃよ」

近右衛門はそう言つと、エヴァに俺の事を話し始めた。

「ククク．．．人間の欲望が生み出したメダルの化物か．．．面白い。アंकと言ったか？」

近右衛門の話を聞き終えたエヴァは、楽しそうに俺を見る。

「お前と居れば退屈しなさそうだ。良いだろう、お前の面倒．．．私が見てやる」

そう言いながら、エヴァはふんぞり返つて俺に手を伸ばした。だが．．．

「そうか。こつちとしては願ひ下げだがな」

「．．．なんだと？」

俺の言葉で、エヴァの笑顔は冷徹な物へと変わった。

「それは．．．どうということかの？」

近右衛門も俺の言葉の意味が分からないと言わんばかりに俺を見ている。

「簡単な理由だ。俺に得がない」

近右衛門と話し、此所の警備員を引き受けたのは．．俺と近右衛門の利害が一致したからだ。

俺は生きる為の資金とセルメダル

近右衛門は侵入者の排除と木乃香の安全

俺が動く事で、互いに得をするから応じた．．それだけだ。

エヴァは恐らく、俺の力を借りて何かをするだろう。

だが．．それで俺の得が生活の確保だけ？

安い。安すぎる。

「お前は俺を使って何かをしたいんだろうが、その対価が安すぎる。俺の力を借りたいんだったら．．お前の欲望を見せてみる」

俺の言葉に、エヴァは冷たい視線を投げ掛けてくる。

緊迫した空気の中．．

「いいだろう．．話してやる。私の欲望を」

エヴァが、重たい口を開いた。

「私の欲望は．．この学園に15年間縛り続けている呪いを解く事だ」

エヴァは俺にすべてを話した。

自分が真祖と呼ばれる吸血鬼であり、数百万ドルの賞金首だったこと。

『偉大な魔法使い』．．『千の呪文の男』と呼ばれる人間に『登

サウザンドマスター

校地獄』と呼ばれる呪いをかけられた事。

本来ならば3年だけだったはずの呪いが、15年間に渡って自分を縛り続けている事。

そして．．唯一分かっている解呪の方法に、『千の呪文の男』の血縁の血が必要だということを。

「なるほど．．呪いとやらを解いて自由になりたい．．か」

なかなかの欲望．．．と言いたいが、その手伝いをする．．．というのも、まだ得としては安い。

そう考えていた時．．．忘れかけていた言葉を思い出した。

『お前を送る世界には「魔法」がある。それを吸収する事で、セルメダルを生み出せるようにした』

ヤミーのことばかりで忘れていたが、神は．．．たしか、そう言っていたはずだ。

「近右衛門」

「なんじゃ？」

「このガキ．．．エヴァに掛けられた呪いって奴は．．．魔法か？」

「うむ。登校地獄という呪いは、不登校児などに登校させるため生み出された『魔法』じゃ」

となれば．．．俺の考えが正しければ。

「おい」

「なんだ？」

コイツの体を縛り付けているという呪い

「お前の欲望．．．叶えられるかもしれないな」

エヴァの呪いから．．．セルメダルが稼げるかもしれないってことだ。

私の前に立つ男．．．アंकは、私の欲望を叶えられるかもしれないと言った。

私の欲望．．．それは、この学園に15年縛り続けている呪いを解き、自由になる事。

何年も調べ、ようやく解呪の手がかりを掴んだのに、この男は．．．平然と、私にそう言ってきた。

巫山戯るな。

私は、そう思った。

あの男も、3年経てば呪いを解きにやって来ると言っておきながら．

．．来なかった。

何年も何年も、待ち続けたのに．．．だ。

今更呪いを解けると言われても、私は信じられないという思いがあった。

あつたのだが．．．

「．．．本当か？」

私の心とは裏腹に、口からはそんな言葉が出て来た。

「ああ。賭けだがな」

アंकは私に1枚のメダルを見せてくる。

「保険だ。これが失敗したら、お前が呪いを解く為に動く手伝いをしてやる」

そう言つて、アंकは私の中にメダルを入れ．．．胸に右腕を突き立てた。

僅かな異物感はあるが、痛みもなければ、血の一滴も流れていない。

「．．．コイツか」

アंकがそう言った瞬間、私は虚脱感に襲われた。

それと同時に．．．今まで自分を縛り続けていたものが抜け落ちて行く

そんな感覚がした。

結果として、賭けは成功だった。

エヴァの胸に腕を突き立てながら、コアメダル．．．タカの力を使って視力を強化すると、体の中から無数の鎖が伸び、エヴァの体を雁字搦めにしていた。

鎖が胸の中央にある紅い光から伸びていた事から、これが『呪い』とやらなんだろう。

ソイツを掴んで、セルメダルへの変換を試みたら．．．驚いた事に、力が大きかったのか、100枚近くのセルメダルに変換された。

変換とメダルの吸収を終えて腕を引き抜くと、エヴァは何度も自分

の体を確かめていた。

「く．．．クク．．．．漸く．．．漸くだ」

手のひらを見ていたエヴァは、拳を作ると笑い始める。

「15年．．．待ちに待っていた．．．この時が、自由になる時を」
呪いから解放された事が嬉しいのか．．．エヴァは、笑いながら涙を流していた。

呪いが解けて嬉しい．．．か。

ただのメダルの塊だった俺には分からねえな

解放された喜びなんて．．．。

「アंक」

そんな事を考えていると、エヴァが話しかけて来た。

泣き止んだみたいたが、まだ目元を袖で拭っている。

「お前には感謝する．．．」

「勘違いするな．．．お前は呪いを解きたかった、俺はセルメダルが欲しかった。今回の事は、利害が一致しただけだ」

「素直じゃない．．．いや、自分よくぼうに正直なだけか。まあいい」

目元を擦りながら礼を言ってくるエヴァにそう言つと、今度は呆れたような口ぶりで呟いていた。

「改めてお前に言うが．．．お前の面倒は私が見てやる」

「今更じゃが．．．本当に良いのかの？」

表情を引き締めて俺に話すエヴァに、近右衛門が質問をし続ける．．
．．そういえば、コイツ居たんだったな。

「登校地獄が解けた吸血鬼と、その呪いを解いた存在．．．監視するなら、一緒に置いたほうが都合が良いだろう？それに．．．」

近右衛門の質問に答えながら、エヴァは俺を見てくる。

「コイツと居れば、打算なしで退屈しなさそうだ」

こうして．．．俺は住处を得る事になった。

ちなみに、学園長室前で律儀に待っていた木乃香がメダルを入れた時の事を聞いて来たが．．．都合が悪くなりそうだったから「手品」

と言っ
て片付
けた。

警備と顔合わせと腕試し（前書き）

またもグダグダ（？）な最新話です。

今回の話で分かると思いますが・・ややアンチ気味で話を進めていこうかと思えます。

警備と顔合わせと腕試し

エヴァの呪いを解き、家に住む事になって数日後の夜
リビングでアイスを食べていた俺の携帯が鳴った。

「何の用だ？」

『ふおおおお、夜分遅くすまんのぉ』

電話の相手は近右衛門だった。

俺は、アイスを齧りながら携帯に耳を傾ける。

『実はの、今日から警備の仕事をしてもらうのじゃが・・・その際に、他の者達との顔合わせをして欲しくての』

「顔合わせ・・・」

大方、俺の紹介と実力と試す・・・そう言った意味合いが兼ねてあるんだろうが・・・

そこで、一つの問題が出て来た。

「俺の力・・・か」

俺・・・グリードの力は強すぎる。

炎を操る程度なら、人間の十分に出来る。

だが・・・それ以上となると、グリードの姿をとらざるを得ないだろう。

そうなれば・・・俺は間違いなく奴ら・・・魔法使いから危険視されても可笑しくない。

『僕としても、お主と他の者達の間溝が出来るのを避けたいところじゃ』

この爺がどんな意味で言っているかは分からないが・・・要するに、そういう関係になった場合、互いに不利な事が起きる事がある。

まあ・・・この爺はお人好しだ。

俺が此所で暮らしにくくなるのを避けたい・・・そう言ってるんだろ。

「善処はする」

そう言う俺は電話を切った。

「ジジイからか？」

電話を切った直後、2階の寝室からエヴァが降りて来た。

「ああ。今夜の警備で他の奴らと顔合わせをして欲しいだ」と

「顔合わせか．．．大方、実力を試す意味合いも兼ねてるんだろう」

俺の言葉に、エヴァはさっきまで考えていた事をそのまま言いながら、俺の隣に腰を降ろした。

「あまり暴れすぎるなよ？お前の力は、魔法使い連中にとって脅威だからな」

「善処はする．．．近右衛門にもそう言った」

隣に座ったエヴァの言葉に、電話で近右衛門に言ったように呟くと、俺は食い終わったアイスの棒をゴミ箱に放り投げた。

しかし、魔法使いか．．．。

（魔法が使える分、欲は深そうだな）

奴らの欲望から、何枚メダルが生まれるか．．．。

そう思い、俺はほくそ笑んだ。

深夜

誰もが寝静まったこの時間、『世界樹』と呼ばれる樹のある広場に僕．．．タカミチ・T・高畑ほか、この学園の魔法先生、魔法生徒は集まっていた。

警備の前に、学園長が新しく雇った警備員の紹介を行っらしいのだけれど．．．。

「もうそろそろ時間なのじゃが．．．」

そう言いながら、学園長は懐から時計を取り出す。

時間はあと数分で0時。

学園長は、その時間に来るように伝えたらしい。

「まったく．．．時間も守れないような人間が警備員の仕事を．．．」

ましてや『偉大な魔法使い』になれるでしょうか？」

学園長の呟きに、僕の隣に居た黒人の教師・・・ガンドルフィーニ先生が悪態をつく。

彼は、人一倍正義感が強い。

それが、生真面目な性格に拍車をかけ・・・『偉大な魔法使い』に対する意識を強めている。

時間を守れないのは一理あるけど、もつと言葉があるだろう
そう思っ僕が口を開いたその時

ヒラ・・・

僕の目の前に、赤い羽が一枚落ちてきた。

(羽・・・?)

落ちてきた羽を拾い、僕は考える。

この場所には認識障害・・・

つまり、『何故か知らないけど、近づきたくない』

そう暗示させる魔法がかけられている。

羽が落ちてくる事自体ありえないのだ。

『！』

僕以外にも羽に気づいた人が居るみたいで、全員羽が落ちてきた方

・・・『世界樹』を見上げる。

そこには・・・

「時間どおりだな」

赤いスラックスに白いシャツ

金色の髪を流すように、右にセツトした青年が、世界樹の枝に座っていた。

この学園の中心に生える大きな樹・・・『世界樹』と言っらしいが、俺はその枝の上に座って集まった魔法使い達を見下ろす。

「ふむ、たしかに時間ちようどじゃの」

俺を見た近右衛門は、懷に時計をしまいながら俺に声をかける。

「さて、皆に集まってもらったのは彼を紹介するのも兼ねておる。

彼が新しく警備員に雇ったアंक君じゃ」

近右衛門が魔法使い達に俺を紹介するのを聞きながら、俺は枝から飛び降りて地面に着地する。

周りを見ると、人間．．．大人だけではなく、ガキも混じっている。近右衛門とエヴァ、エヴァの所にいた茶々丸以外の人間共は、俺を警戒したような目で見てくる。

「彼には、今夜から警備の仕事に加わってもらうが．．．皆も、彼の実力を知らぬと連携がとれんじやる。誰か、この中の誰かに手合わせをして欲しいのじゃが．．．」

近右衛門の言葉に、集まっていた人間共が息をのむ。

そんななか．．．

「僕がいかせてもらいます」

スーツを着て、無精髭を生やした眼鏡の男が一步前に出た。

魔法使いどもが見ているなか、俺と眼鏡の男は向かい合う。

「はじめまして、僕はタカミチ・Ｔ・高畑。アंक君だったね？よろしく頼むよ」

そう言つて、男．．．タカミチは両手をズボンのポケットに入れる。こいつ．．．余裕とでも言いたいのか？

そう考えたが、俺は冷静に相手を見る。

たしか．．．人間の鬨いには、『構えのない構え』があるそうだ。という事は．．．これがコイツの構え、か。

そう考えると、俺はコアの力を１割解放した。

僕が向かい合うように立つと、アंक君の目が変わった。

茶色かった瞳は紅く染まり、元々鋭かった眼光が更に鋭さを増す。

それは．．．そう、猛禽だ。

鷹などの猛禽類のような鋭さを持つ紅い瞳
恐らく、魔眼の一種なのだろう。

（油断ならないね．．．）

そう心の中で呟くと、僕は彼を見ながら体に魔力を巡らせる。

そして．．．

フォンツ

師匠．．．ガトウさんから教えてもらった無音拳．．．通称居合い
拳を放つ。

視認は不可能と呼べる、僕の唯一の武器

けど．．．

「っ！」

アंक君は、間一髪だが．．．それを躲した。

「驚いたよ。所見で躲されるなんて思ってたなかった」

僕は、アंक君にそう言いながらも、数発の無音拳を放つ。

「チッ！」

完全に拳を捉えられていないのだろう、アंक君は右に飛び退く事
で拳を躲した。

そして

「オラッ！」

僕に右手を突き出したかと思ったら、彼の掌から火球が放たれた。
難なく躲し、追撃を加えながら僕は思考を巡らせる。

（炎属性の魔法の射手か．．．でも、あの火球．．．）

本来、魔法を使えばどんなものでも魔力を感じ取る事が出来る
でも．．．彼の火球からは、魔力が感じられない。

（どういう事だ．．．？まさか、超能力者ともいうのか？）

「考え事をしている余裕があるのか？」

思考の海に沈んでいきかけた時、いつの間にか僕の懷に潜り込んで
いたアंक君が問いかけた。

「っ！」

懷に潜り込まれていた事に気づいた僕は、彼と距離をとりながら無音拳を4発放つ。

だが……

「ふん、見えない速さの拳か……慣れればどうという事はないな」
彼は、まるで……いや、本当に……完全に捉えたのだろう。

放たれた無音拳を難なく躲すと、僕の懷に再び潜り込んだ。

そして

「フッ！」

右足でハイキックを放ってきた。

速さはそこそのものだが、躲せない速さじゃない。

そう思つて首を逸らして迎撃の準備をする……それが、一つの間違いだった。

「！」

アंक君の蹴りは完全に僕を掠つてもいなかった。

だが……僕の右頬に一線の紅い筋が生まれた。

（真空刃？！彼はいつたい……何者なんだ！？）

初めはヒヤヒヤしたが、魔法使いもこの程度か？

最初はタカミチという男のペースだったが、今は俺がペースを掴んでいる。

奴が放つ拳は、既にタカの力で全て捉えた。

それを難なく躲し、コンドルの力で蹴りに真空刃を纏わせ、時折炎を放つ。

だが……奴が手も脚も出せなくなった訳じゃない。

俺の攻撃の合間……隙間を縫うように拳を放ち、それで何度も攻撃が中断した。

僅かに視線を観戦している人間共に向けると、奴らは驚愕していた。

俺が奴と互角に戦っている事に驚いているみたいだが・・・

「飽きたな・・・」

「・・・何？」

俺の呟きが聞こえたのか、タカミチが眉を顰める。

「飽きたって言ったんだ。魔法使いという奴らの力がどの程度か分かったしな」

「・・・巫山戯ているのかい？」

言葉から怒気が感じられるが、そんなもの生温い。

「巫山戯ているのはお前だろう？本気も出さずに戦っているんだからな」

俺の言葉を聞いたタカミチが、凶星と言わんばかりに目を見開く。

俺の場合、力が大きすぎるから自分で抑えているだけだが・・・コイツの闘いを見ると、手加減しているに過ぎない。

虫酸が走る。

俺は、1割しか解放していなかったコアメダルの力を2・・・いや、3割解放する。

「！」

その力を感じ取った人間共は、そろって息をのむ。

無理もないか・・・俺の体からは、コアメダルの余剰エネルギーが紅いオーラとして放たれ

そして・・・俺の右腕はグリード態に変わり、背中からは一對の紅い翼が生えている。

ある者は俺の姿を見て

ある者は、俺の力の大きさに驚愕している。

「君は・・・いったい・・・」

すぐ近くで俺の力に中っているタカミチは、汗を流している。

漸く、力の違いに気づいたか。

「話す義理があると思うか？」

そう言くと、タカミチは意を決したように両手を広げる。

「右手に魔力．．．左手に気．．．合成！」

そう言つて、両手を合わせた瞬間．．．タカミチから先ほどとは桁違いの力を感じた。

たしか．．．エヴァが言っていたな。

『魔力』と『気』．．．相反する2つの力を一つに合わせることで、爆発的な力を得る技法．．．『気と魔力の合一』だったか？

まさか、現物を見られるとはな。

「君が何者かは本人から聞きたいけど．．．話す気はないみたいだね」

「ああ、格の違いも知らない奴に教える義理はないな」

そう言つと、俺たちは互いに構える。

俺は左掌をタカミチに突き出し、右手を弓を引くように引き絞る。対して、タカミチは先ほどと同じようにポケットに手をつ込む。

これから放つのは、互いの今放てる最大

周りが固唾をのむなか．．．俺たちは打ち合わせしたように互いに向かつて飛び込んだ。

タカミチが拳を放つ前に、俺は右の拳を突き出す。

そして．．．タカミチの右腕に動きが見えた瞬間．．．俺は握っていた拳を開いた。

「グッ！」

右の掌に予想以上の衝撃が襲いかかり、セルメダルが数枚飛び散る。だが．．．この瞬間

これが、俺が待っていたものだった。

「なっ．．．！」

タカミチが驚愕して俺を見るが、それは予想済みだ。

何をしているか？

答えは簡単だ。

奴の拳を受け止めた瞬間、俺は奴が纏っていた力を『セルメダルに変換した』。

これが何を意味するかと言うと．．．言わなくても分かるだろう？
今のタカミチは、俺に力を奪われた事で今は普通の人間と変わらない。
い。

そして．．．

「これで済みだ」

奴の目の前には、グリード態になった俺の右手．．．貫手が目と鼻
の先にある。

つまりは、俺の勝ちだ。

「このバカが！あれほど暴れすぎると言っただろうが！」

タカミチとの闘いが終わり、魔法使いどもの所に戻って早々．．．
エヴァが俺に怒鳴って来た。

「知るか。俺をナメた奴が悪い」

そう言つて、俺はタカミチを見る。

奴は、俺の正体が気になるのか、警戒を含んだ視線を向けている。

「まあエヴァ、落ち着かんか。皆の者も彼の实力は分かったじやろう？それで、今夜から彼を警備の仕事に入れる。異論ある者はおるか？」

「私は納得いきません」

近右衛門の言葉を聞いて、黒人の男が手を挙げる。

「彼は魔法を使っていない．．．それどころかあの腕や翼．．．彼は魔族かその類でしょう。彼をこの学園．．．そして、『偉大な魔法使い』を目指す子どもたちと警備させるなど．．．」

黒人の言葉を聞いて、俺は思い出した。

たしか．．．『偉大な魔法使い』．．．それも『千の呪文の男』と呼ばれる奴は、英雄視されているんだっとな。

そして、同じ頂を目指すバカな人間共が多い、と。

「クク．．．」

俺は、黒人の話を聞いて笑みをこぼした。

「．．．何が可笑しいというのだね？」

黒人は俺が笑ったのに気づき、不愉快そうに尋ねてくる。

だが．．俺にとっては実に愉快だ。

「いや、人間はつくづくバカな生き物だと思ってな」

「なに．．？」

「だってそうだろう？ お前達が目指す偉大な魔法使いは．．」

「何百人も殺した『英雄様』で、使い捨て出来る駒なんだからな」
俺の言葉に．．エヴァとタカミチ、近右衛門を除く全員が凍り付いた。

英雄と正悪と人間の欲望（前書き）

文才ある人が羨ましいです。

という訳で最新話

こんなにグダグダで大丈夫か？

英雄と正悪と人間の欲望

俺の言葉に、近右衛門、タカミチ、エヴァ以外の魔法使いどもは凍り付いた。

エヴァは何も感じていないという様子だが．．．あとの二人は苦々しげな表情を浮かべている。

「何を．．．我々が目指す偉大な魔法使いは、世のため、人の為に魔法を使う。それに、かの『千の呪文の男』は嘗て魔法世界で起きた戦争を終わらせた組織『紅き翼』のリーダーだ。彼程偉大な存在は居ない」

「そうだな。だが．．．ソイツ程人を殺し、周りに恨まれる人間もいないだろう」

近右衛門に抗議していた黒人が話すのを聞き、それに続けるように俺は言葉を紡ぐ。

「戦争つてのは全て無事に終わらない。そこには必ず『殺し、殺された』が付きまとう。知っているか？人を一人殺せば殺人犯だが．．．戦争で百人殺せば、英雄らしいぞ？」

それに．．．そう言つて、俺は言葉を続ける。

「国の上の人間共は、そうやって何百人も殺した人間を『国を救った英雄』と祭り上げる。そして．．．人を殺した事実を隠して、後の人間に伝える．．．『彼はこのような偉業を成した。皆も彼のようになりたいか？』とな」

俺の言葉を聞き、魔法使いどもは息をのむ。

恐らく、俺が言つた通りの言葉を言われた人間共が何人も居るんだろう。

「そして、唆されて『偉大な魔法使い』になった人間は良いように扱われ．．．使い道がなくなれば蜥蜴の尻尾切り。英雄に憧れる馬鹿が多いから、駒が減る心配もない．．．欲望に振り回されてかわいそうな事だ」

鼻で笑いながら言うと、奴らは嫌悪感をむき出しにしてくる。

「私は、彼の意見と同意見だね」

「龍宮君?!」

そんな中、一人の女が口を開いた。

浅黒い肌に黒い長髪．．．龍宮と呼ばれた女は俺を見る。

「私も戦場を生き抜いてきたけど．．．この魔法使い．．．特に、魔法生徒は甘すぎる。世界を知らなさすぎるというのもあるけど、何より理想主義すぎて話にならないね」

「ああ。正義だ悪だと言っているが．．．そんなもの、ありもしない」

俺と龍宮の会話を聞いている連中の中、タカミチが俺を見る。

「正義と悪がないと言っけど．．．じゃあ、何があるって言うんだい？」

「欲望だ」

タカミチの質問に答えると、魔法使い連中は一斉に首をかしげ、訝しげな視線を送ってくる。

「戦争を起こすのは人間の欲望。正義だとか悪だとか．．．そんなもの、欲望を隠すものに過ぎないんだよ」

そうだ．．．「正義の敵は悪」、「正義の敵は別の正義」だと言うが、そんなものはまやかに過ぎない。

結局の所、戦争は「満たしたい」という国同士の欲望のぶつけ合い。それ故に、勝った国は負けた国に金や領土、資源を要求する。

「それで．．．まだ『正義』を語る偉大な魔法使いを目指す人間はいるか？」

俺の言葉に、魔法使いどもの一部が俯く。

そんななか．．．

「やはり．．．私は君が居る事は反対だ」

さっきの黒人が武器を構える。

それに倣って、数人．．．いや、数十人の魔法使いどもがそろって武器を構え始めた。

「我々の掲げる『正義』を欲望と言って誑かす君を、我々は放置出来ない。即刻．．．この学園から立ち去りたまえ」

黒人がそう言っていると、周りに居た魔法使いどもは各々魔法の発動準備を始める。

「ソイツに何かしてみろ。お前達．．．ただでは済まないぞ？」

剣呑とした空気が漂う中、俺の隣に居たエヴァが魔法使いどもを見て口を開いた。

「ほお．．．『悪』同士、仲間意識でもあるのですか？闇の福音」

エヴァが口を開いたのを見て、黒人の隣に居た浅黒い肌の修道女が言葉を発する。

だが．．．

「静まらんか！」

近右衛門の怒声が、当たりに響き渡った。

その言葉．．．いや、近右衛門から放たれる覇気に魔法使いどもが畏縮する。

「儂ら人間の一方的な正義．．．否、欲望と呼ばれるまでに歪んだそれが、どのような悲劇を生んだのか忘れた訳ではなかるう。それに．．．儂らのその欲望が、彼らを生んだのじゃ」

近右衛門は、そう言いながら俺を見て、もう仕分けなさそうに言葉を紡ぐ。

「学園長．．．それはどういう意味ですか？」

「うむ．．．アंक君はの．．．」

「近右衛門」

近右衛門が俺の事を話そうとするが、俺はそれを遮って近右衛門を見る。

その意味が分かったようで、近右衛門は俺に譲って来た。

「近右衛門が言った意味は．．．こういう事だ」

口で言うより、実際に見せた方が良い。

俺は、近くにあった街灯に触れ．．．コアメダルの力を3割解放する。

街灯に触れていた右腕がグリード態に変わり、瞳の色も紅く染まる
そして．．．

ジャララララッ！

触れていた街灯が．．．『メダルに変わった』。
『！』

その様子に、俺以外の連中．．．エヴァや近右衛門ですら息を呑んだ。

「お前達が『正義』だ『悪』だと言うのは勝手だが．．．『欲望』の前で、そんなものは塵と同じなんだよ」

「な．．．君はいたい．．．」

セルメダルに変わった街灯を見て、タカミチが口を開く．．．その言葉、二度目だな。

「特別に教えてやる．．．俺はアंक。お前達人間の『欲望』が800年前に生み出した『メダル』の怪物．．．グリードだ」

欲望．．．それは人間が内包する無限のエネルギー

それはあらゆるものを生み出し、あらゆるものを終わりへ導いた。
なかでも、『人間』は欲望の塊と言って良い。

車も、飛行機も、電車も、電話も．．．現在生きているこの「文明」も

全ては人間の『欲望』から生み出された。

そんななか．．．遡る事800年前。

当時の錬金術師たちの『欲望』が全ての始まりだった。

『神の領域』への挑戦

人間の手で、新たな生命．．．人工生命を生み出したい
その欲望が始まりだった。

錬金術師たちは技術の粋を集め、あるものを作り出した。

『オーメダル』

動物の力と人間の欲望

その結晶とも呼べるそれ．．．特に、動物の力が宿る『コアメダル』は8種類作られた。

鳥の力が宿る赤のメダル

昆虫の力が宿る緑のメダル

猫科獣の力が宿る黄色のメダル

重量系動物の力が宿る銀のメダル

水棲動物の力が宿る青のメダル

恐竜の力が宿る紫のメダル

爬虫類の力が宿る橙のメダル

そして．．．今はない甲殻類の力が宿る黒のメダル

メダルは、各種10枚ずつ作られた。

その中から1枚を抜き、9枚という欠けた数字にする。

そうする事で、コアメダルに『満たしたい』という欲望が生まれ．．．

．．．意思が生まれる。

そして．．．コアメダルには劣るが、人間の欲望さえあれば無限に増殖できる『セルメダル』

コアとセル．．．2種類のメダルで体を構成した存在

それが『欲望の王』．．．グリード

「それが、俺だ」

彼．．．アंक君の言葉を聞いて、僕は啞然とした。

彼の話の内容は、僕たちの理解を超えていた。

神への挑戦．．．人工生命の誕生

それだけは、クローン技術などの科学で行われている分野だ。

だけど．．．人の欲望を素に作り出された存在なんて．．．次元が違ふ。

欲望が素ということは．．．それしか知らないとも言える。

「俺たちグリードは何も感じねえ。旨い物を食っても、綺麗な景色を見ても何も感じねえ．．．満たされねえ。あるのは『もっと欲しい』って欲望だけだ」

分かりやすく言えば、味の抜けたガム食って、白黒写真を眺めるのと同じだ

そう言葉を続ける彼を、僕はただ見ているしかなかった。
いや．．．僕だけじゃない。

ガンドルフイーニ先生も、葛葉先生も、瀬流彦先生も

此処に居た魔法使いは、ただ見ているしかなかった。

満たされず、ただ『欲しい』という欲求．．．欲望

彼らグリードと呼ばれる存在には、それしかない。

それは．．．なんて地獄。

僕たちが言う正義や悪も、欲望の前には塵に等しいだろう。

彼が言う通り．．．その言葉は、自分を正当化したいという欲望が作った衣に過ぎないのだから。

「俺も．．．１年前までそうだった」

再び思考の海に沈みかけた意識を、アंक君の言葉が引き摺り上げる。

「俺は、８００年前に封印され．．．１年前に解放された」

それから．．．彼は言葉を、物語を話し始める。

それは、人の欲望が織りなす物語

８００年前に封印され、現代に蘇った怪物と『欲望』を持たない青年の闘いの物語

人間の欲望が生み出す怪物と、欲望の力で人を救おうとする王
人の体を借りた怪物と青年のぶつかり合い

そして．．．欲望と欲望の世界を賭けた闘い

その終わりは、欲望が生み出したメダルの消失で終わりを迎える
そこに正義や悪はない

あるのは．．．『世界の終末』を願う欲望と『世界を救いたい』という欲望だけ

まさに．．．それは欲望が織りなす物語

「俺は満たされた。ただのメダルの塊だった俺が、死にかけた人間の体を借りることで生きて．．．死ぬ所まできたんだからな」

「君は．．．何が欲しかったんだい？」

話し続ける彼に、僕は聞きたかった。

欲望が生み出したメダルの塊

その彼が欲しかったものを。

金か？

名誉か？

力か？

僕以外の魔法使いも、皆がアंक君の答えを待っている。

「かなり単純だ。世界を確かに味わえるもの．．．命だ」

その言葉を聞いて、僕は感じた。

彼は、正義や悪で計れる存在じゃない。

純粹だ。

ただ欲しいという欲望のまま動く

そして．．．僕たちが当たり前前に感じ、尊んでいるものを同じよう

に欲する

だから．．．

「アंक君」

僕は、彼の前に来て右手を差し出した

「僕は、君を歓迎するよ」

奴らの反応は、俺の予想を裏切るものだった。

タカミチは俺に右手を差し出してくる。

それだけじゃない

「確かに、僕たちの正義って．．．自分を正当化したいって所もあったから．．．そう考えると、欲望なんだよね」

長身で細目の男が俺に話しかけてくる

「正義や悪は欲望の前では塵．．．そうかも知れんな。自分で正悪を決める事自体、烏滸がましいか」

サングラスをかけ、髭を生やした男が

「もっと単純なものだと気づくべきでしたね。私たちは正義の為に戦うんじゃない．．．大切なものを守りたいという欲望のままに戦っているんです」

眼鏡をかけた長髪の女が

皆が．．．俺を見て苦笑していた。

「君が気づかせた．．．いや、思い出させてくれたんだよ」

呆然と見ていると、タカミチが話しかけて来た。

「僕たちは正義や悪．．．世界が言うそれを背負っていて忘れていたんだ。もっと大切なものを．．．」

「ふん．．．」

俺は、タカミチの言葉を聞きながら顔を背ける。

「予想を裏切られたな」

顔を背けた先では、エヴァと近右衛門が笑っている。

「ああ．．．だが、俺もやりやすくなった」

俺を歓迎するってことは、俺の力を借りるという事だ。

その分．．．お前達の欲望、利用させてもらっぞ？

神と可能性と欲望の青（前書き）

おはよう、こんにちは、こんばんは
観察者の諸君、ご機嫌如何かな？

なに、どうでも良い？

まあ、そこは社交辞令といこうじゃないか。

俺が誰か？

ふむ、諸君が俺を見たのは二度目だがこうして話すのは初めてか。

ある者は世界

ある者は宇宙

そして、ある者は神と呼ぶもの

とでも言っておこう。

ここまでの欲望の鳥が紡いだ世界
如何だっただろうか？

世界の可能性を予想し、その結果に一喜一憂した者もいるだろう。

さて・・・そこで諸君に一つ提案だ。

俺が持つこのメダル

諸君は見覚えがあるだろう

そう・・・オーメダル

なかでもコアメダルと呼ばれるものだ。

こうして見ると、なかなか美しいものだな

金縁に青、おまけに鯨の刻印ときた。

ここから、俺が話そうとしていることが予想出来た諸君は聡い。

俺は、新たな出演者を送ろうと思う。

愛を知らず

愛を感じれず

偽りの愛を与えた哀れな青

彼女と欲望の鳥

二人の欲望が、世界にどのような影響を与え
可能性が広がっていくのか
実に興味深いと思わないか？

神と可能性と欲望の青

．．．暗い

上も

下も

前も

後ろも

右も

左も

全てが暗い

立っているのか

座っているのか

寝ているのか

浮いているのか

沈んでいつているのか

漂っているのか

それすら曖昧

そこに．．．『私』はいた。

．．．あれ、『私』？

私は．．．

そうだ、思い出した。

私は．．．メズール。

人間に作られたメダルを元に生まれた存在．．．グリード
水棲系メダルを核とする．．．水棲の王

私のコアは、オーズの坊や

正確には、坊やが持っていた紫のメダルに砕かれ、私の意識は消滅した。

なら．．．ここにいる私は誰？

「やあ、おはよう。それともこんにちはが良いかな？いや、こんばんはか？」

「．．誰かしら？」

「つれないな。まあ、挨拶などどうでも良いか。俺は．．ある者は世界と呼び、ある者は神と呼ぶ者だ」

神．．

「まあ、それすら今はどうでも良い。お前が聞きたい事は別の筈だ」
「．．そうね。」

「じゃあ、聞かせてもらっけど．．」

何故、私は此処に居るのかしら

私の意識は、コアが砕けたときに消滅した筈よ？

「たしかに、お前の意識は消滅した．．だが、僅かな残滓が残っていたからかき集めただけの事」
「．．。」

「理由は話した。そろそろこちらの話をするが、構わないか？」

「．．ええ。」

「では、話すとするが．．その前に」

？

「お前．．愛を感じたくはないか？」

「．．．．？」

「他者から愛される事がどういう事か、愛するという事がどういう事か．．感じてみたくはないか？」

「．．どういう事かしら」

「なに．．今、お前の同僚がある世界で生きている。だが、可能性を広げる為には役者が必要だ」

つまり．．そこに私も行け、とでも言うのかしら？

「正解だ」

でも、私に同僚なんて．．．．

「欲望の鳥．．お前達がアंकと呼んでいた存在」

アंक．．彼が、そこにいるの？

「ああ。俺が命を与えたからな」

「．．私も、貴方の提案に乗れば、知る事ができるのかしら
「ああ、その為の命と力は用意しよう」

．．．．．

「それで．．お前の答えは？」

．．知りたい

愛するという事が

愛されるという事が、どういう事か。

私は、感じる事が出来なかった。

感じる前に消えてしまったもの。

だから．．それを感じる事が出来るなら

私は．．貴方の提案に乗るわ。

「クク．．さすが欲望の王、と言ったところか」

それで．．貴方は私に何を求めるのかしら？

「簡単な話だ。欲望の鳥同様、その世界で好きに生きれば良い」

．．前の世界みたいに人間を攫うかもしれないわよ？

「それはない」

．．随分と自信があるのね

「お前も、それをする必要がないとわかる。とりあえず、前払いだ」

「．．．ん」

次第に意識がハッキリとしてくる。

意識だけじゃない。

『私』が居るといふハッキリとした感覚が広がる。

「前払いで命と力を与えた。欲望の鳥同様、失った力もあるがな」

神らしい人間の言葉を聞きながら、私は体を確かめる。

私の姿は、人間の姿を真似ていたときと同じ姿。

力は．．．．！

「どういうこと．．．コアメダルが9枚揃ってる」

「餞別、というものだ。と言っても．．．世界で不必要な力を省き、新しい力を与えた。詳しくは欲望の鳥にでも聞くんだな」

体の中から感じる力に驚いている私に、人間は投げやりとでもいう風に答える。

どうやら．．．彼が神だというのは間違いなさそうね

「この門を潜れば、欲望の鳥が向かった世界に着く」

神がそう言つと、彼の後ろに大きな門が現れる。

門からは眩い光が差し込むけど．．．不思議と、嫌と感ずることはなかった。

「さあ、俺に見せてくれ。世界の新たな可能性を」

「そんなもの、勝手に見れば良いでしょう？私はただ．．．愛を感じたいだけよ」

神がという言葉に素っ気なく返事をする、私は横を通つて門を潜つた。

．．．まったく、グリードと呼ばれる存在はみな欲望に忠実な存在だ。

実に哀れで．．．興味深い。

この2つの欲望

それが世界にどのような影響を与え、可能性を広げていくか。

さあ、観察者諸君

新しい世界を楽しもうじゃないか

出会いと再会と動き出す齒車

魔法使いどもに受け入れられ、この街．．．麻帆良で暮らし始めて数ヶ月

初めは俺に不信感や反感を抱いていた連中も、いつしか打ち解けるようになり、仕事での連携は上々と言える。

そして、此所に来て1年が経つまで数ヶ月となったある日

俺は、近右衛門に呼ばれた。

「で、朝早くから何の用事だ」

「ふむ、すまんの。実はお主に折り入って頼みがあるんじゃないよ」

俺の言葉に答えながら、近右衛門は俺に1枚の写真を見せて来た。写真に写っているのは赤毛のガキ．．．外見はエヴァと同じ年、つまりは10歳に近い。

肩程までの長さだろう赤毛を後ろでまとめ、眼鏡を掛けた小僧だ。

「数日後、その写真の少年がこの学園に『修行』に来る」

修行．．．ね

話を聞いた所、小僧は英雄と名高い『千の呪文の男』の息子らしい。

「そこで頼みがあるんじゃないが．．．」

「ソイツのサポートをしる、か？」

魔法使い連中の事だ。

英雄の息子を強くして、使い勝手の良い駒に仕立て上げる
そういう魂胆だろう。

「いや、お主に頼む事は別にある」

「なに．．．？」

「お主に頼みたい事。それは、その少年．．．ネギ君に『連合』の人間が近づくのを阻止して欲しいんじゃない」

連合．．．たしか、魔法世界にある国の一つ『メガロメセンブリア』
だったか？

近右衛門から聞いた話では、関東魔法協会という組織はその連合の傘下だったはず

「儂．．．いや、この学園における魔法使い全員の意思じゃ。彼は『千の呪文の男』の息子として周りから多大な期待を受けておる。それ故に、偉大な魔法使いへの思いは強かろう」

「だろうな。親父が『偉大な魔法使い』．．．それも『英雄』に祭り上げられてるんだ。背中に追いつきたいと思って、周りが見えなくなってるだろうな」

「うむ、故に連合の口車に乗りやすかろう。じゃが．．．儂らは彼を連合の駒にするつもりはない」

ほお．．．

「儂らはたしかに、ネギ君に期待をしておるが．．．それは英雄の息子としてではない。新しい時代を作っていく魔法使いとして、一人の人間として彼に期待しておる。彼奴らの傀儡になどしてたまるか」

「ふん．．．言うじゃねえか」

そう言つて、俺は口元を歪めた。

面白い。

此所の人間共は、あつちの人間共と同じくらい面白い。

映司．．．

人間は欲望一つコントロール出来ない馬鹿な生き物だ。

だが．．．

お前が言つように、一度欲望に負けても人間はやり直せるみたいだな。

そう思いながら、俺は窓から空を見る。

空は青く、俺が復活したあの日と同じ空だった。

それから数日後．．．運命の日を迎える。

1月中旬

中学2年の3学期が始まって数週間が経った頃のこと。

「このかー、携帯鳴ってるわよー」

「わかったー」

寮で一緒に暮らしてる友達．．．神楽坂明日菜から電話が鳴っていることを教えてもらったウチ．．．近衛木乃香は皿洗いを中断して携帯を取った。

「もしもし」

「おお、このかか。儂じゃ」

電話の向こうから聞こえる声

それは良く知った声

学園長．．．ウチのおじいちゃんやった。

「どないしたん？」

『うむ、それがの．．．』

そう言っと、おじいちゃんは話を始めた。

明日、新任の先生が来るらしいんやけど、迎えを頼んどった高畑先

生に急用が出来て迎えに行けないから

代わりに行って欲しいって内容やった。

『そう言う訳なんじゃが、頼めるかの？』

「ウチは別にええけど．．．」

おじいちゃんの言葉に、ウチはそう言いながら明日菜を見る。

近くに居た事で電話の内容が聞こえたんやろ

明日菜はOKサインを出してきた。

「うん、明日菜もええて」

『すまないの。二人で探すのも大変じゃろうし、一人手伝いをよこそう』

「手伝い？」

『うむ。このかも一度あつた事のある者じゃ』

じゃ、明日はよろしくの。と言つて、おじいちゃんは電話を切つた。でも．．．ウチが一度あつた事のある人か。

そう思っていると、一人思い当たる人が居た。

1年前、勝手に決められたお見合いからウチを逃がしてくれた彼が．

（まさか、な．．．）

そう思いながら、ウチは再び皿洗いに戻った。

件のガキ．．．たしか、ネギだったか
ソイツが来る日がきた。

一人で探すのも大変だからとかで、近右衛門が使いをよこすとか言つていたが．．．

「遅いな」

俺は、今回の依頼．．．ネギ・スプリングフィールドを近右衛門のところへ送るという内容だが

その報酬であるアイス（3本目）を齧りながらぼやく。

そんな時だった。

「あ．．．」

「？」

俺を見て呟いたのが聞こえたので視線を移すと．．．

たしか、木乃香だったか？

近右衛門の孫が居た。

「おじいちゃんが言ってた人がアंकさんやったんか」

「まさか、近右衛門が言ってた使いがお前とはな」

おじいちゃんから言われた待ち合わせ場所に居た男の人．．アंकさんと１年ぶりに再会したウチは、予感が当たった事に驚いている反面、喜んでいた。

「ねえ、このか。その人．．」

アイスを食べているアंकさんを見て、寒くないんやろかと思っていると、明日菜が声をかけて来た。

「ああ、アスナに話すのは初めてやったね。この人はアंकさん。前にウチを助けてくれたんよ」

「ふうん．．」

アंकさんの事を紹介すると、明日菜は怪訝そうにアंकさんを見る。

当の本人はどこ吹く風と言った感じで、食べ終わったアイスの棒をゴミ箱に放り投げていた。

「しかし．．ここは人間が多いな」

ゴミを捨て終えたアंकさんが不意に呟いた言葉に、ウチは周りを見る。

今は３学期。

特に、登校強化週間ということもあって、登校中の学生が道を埋め尽くしている。

「ああ、今は登校強化週間ですから。遅刻せんようにつて皆必死なんよ」

「こんな中から一人探せつてか．．チッ」

ウチの話を聞きながら学生を見ていたアंकさんは軽く舌打ちすると、１枚のメダル

あの時のメダルを取り出した。

「あ、そのメダル．．」

「人間一人探すのに使うのは勿体ないが．．贅沢言えないか」

誰．．．って、たしか木乃香が『明日菜』って言ってたか？
「ジューズ缶がいきなりロボットに変わるし、何アレ?!」
「そや、アレ見たのも2回目やけど．．．アレって何なん？」
「アレ．．．ああ、カンドロイドのことか」
俺が呟いた言葉に、二人は首を傾げていた。
カンドロイドの本来の使用目的はオースのサポート
だが．．．

(どこまで話すか．．．．．)

話すとなれば、少なからずオースの話が関わってくる。
迂闊に話す事も出来ないな。

そんな時だった．．．．．。

「キユイツ！」

さつき放ったタカカンドロイドが戻って来た。

「見つかったか？」

俺の質問に、タカは頷いて答える
ちようどいい。

コイツらに話すのは後だ。

それまでに、どう話すかを考えないとな

「探しているヤツが見つかった。行くぞ」

再び飛んで行くタカカンドロイドに着いて行こうとした瞬間

チャリン．．．．．

「!」

俺の中に、聞き覚えのある音が

メダルの音が響いた。

「．．．．．アंकさん？」

辺りを見回す俺に疑問を覚えたのか、木乃香が声をかけてくる。
だが、俺はそれどころじゃなかった。

メダルの音に加えて、感じた事のある気配を感じた。
それも．．．．．この世界じゃありえない気配だ。

（馬鹿な．．．なんで此処にヤツの気配がする？）

「ちよつと、どうしたのよ？」

返事を返さない俺に、今度は明日菜が声をかけて来た。

チツ．．．面倒だ。

「お前達はアレの後を追え」

二人の方を振り返らず、俺はカンドロイドを指差すと、飛んで行った方向とは逆の方向へ歩き出す。

「え、アंकさんは？」

「ちよつと用事が出来た」

木乃香の質問に短く返事を返すと、俺は世界樹の方へと歩き出した。この気配の正体を確かめる為に

「行つてもうた」

ウチは、世界樹の方へ歩いて行つたアंकさんを見て呟いた。でも、どないしたんやろ？

さっきのアंकさん．．．なんか様子が違つとつた。

なんていうんやろ

信じられへんっていうような顔しとつたし

「って、このか。アレ勝手に飛んでつてるわよ！」

「あ、ホンマや」

明日菜の声に視線を移すと、視線の先には

アंकさんがカンドロイドって言つてたロボットが飛んで行く姿が見えた。

アंकさんの行動も気になるけど．．．まずはアレを追うのが先や。探してる人が見つかつとるんやし、見失つて見つかりませんでしたやったら大変や。

「たしか、この辺に．．．」

カンドロイドを追つてたウチらは、駅の近くにたどり着いた。

学生の数もまばらになつとるけど．．．此処に、探してる人があるんやるか？

そう考えた時やった。

「うわっ、なんだこれ?!」

近くで子供の声が聞こえた。

視線を移すと、そこにはカンドロイドと

「男の子．．．?」

カンドロイドをみて驚いてる１０歳くらいの男の子がおった。

俺は、気配を感じた場所

世界樹のある広場に来ていた。

さっき聞こえたメダルの音と気配

あれは、間違いなくアイツの気配

だが．．．．．何故アイツが此処に？

アイツは映司に

オーズに倒された筈。

そんな事を考えていた時だった

「久しぶりね、アंक」

俺の後ろから、女の声が聞こえた。

振り返った先には、木乃香と同じくらいの年格好をした女だが．．．

その女の纏っている雰囲気は、明らかに年相応じゃない。

それに、ヤツが放つ気配は間違いない。

アイツの気配だ。

「なんで．．．お前が此処に居る」

俺は、ソイツを見て眉間に皺を寄せた。

二度と会う事はないと思っていたヤツ

俺と同類のヤツ

「メズール」

水棲系メダルのグリード

メズールが、人間の姿でそこにいた。

キャラクター設定その2（前書き）

今回はメゾールの設定

それと・・・今後出てくるアंकの新たな力についての説明を

キャラクター設定その2

メズール

CV・ゆかな

仮面ライダーオーズに登場した水棲系メダルのグリード

恐竜系メダルの力を使ったオーズ（ラトラーターコンボ）のグランド・オブ・レイジを受けて意識の宿ったシャチ・コアを含むコアメダル3枚が砕かれた事で消滅したが、世界に残留していた意識を神に掻集められ、新たな命とコアメダル9枚を与えられる。

アंक同様命・・・人間の肉体を素体としているため、人間の五感を得た。

グリードとしての能力である液化化や水を操る能力はそのままだが、ヤミーを生み出す能力だけは剥奪されている。

ファントム
欲望の幻影

劇中に登場するグリード内で、アंकのみが使える能力

コアメダルに意識の一部を移す事で、半実体の幻影（腕アंक）を生み出す事が出来る。

全グリード内で唯一、右腕と体の二つに分裂して復活したアंकにしか使えない力と言える。

生み出された幻影は、基本的にアंकの動きをトレースして動くが、意識の込めようによっては

アंक（右腕）のような半自立個体としても動ける

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1567w/>

麻帆良に降り立つ欲望の鳥

2011年10月25日01時01分発行